
優しくありたい

アサオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しくありたい

【Nコード】

N2546G

【作者名】

アサオ

【あらすじ】

ある日の放課後。俺はずっと好きだった彼女を教室に呼び出した。告白するんだ。やっとついた決心を、鈍らせまいと俺は彼女が教室に入ってきた瞬間に思いをぶつけた。……。偽善者だと呼ばれても、最低だと言われても、俺は優しくありたい……。

「ずっと前から好きでした！お、俺と付き合ってください！」

教室に人が入ってくるや否や俺は勢いよく頭を下げ、若干、声を裏返しつつ言い切った。

過去に俺の人生でこれほどまでに緊張したことはあつただろうか？好きな女の子への告白という萩原汰空の一世一代の大舞台。さつきから俺の胸辺りから聞こえる心臓の音がやたらと五月蠅い。ぎゅっと握り閉めた拳にじんわりと汗が滲む。

人気のない放課後の教室。校舎三階の窓の外には山吹色に染め上げられた町並みが広がっている。素晴らしい夕焼けだった。超ナイス！すごい良い雰囲気！告白には超ベスト！このタイミングで告白するなんて流石は俺！やっぱり俺すげえよ！超すげえよ！もうなんてゆーか…す、すげえよ！うん、すげえよ！？

自画自賛して少しだけ現実から目を離す俺がいた。最後のほうなんて同じ言葉繰り返してただけだし。ボキャブラリが少ない。

告白しておいてなんだが今すぐ逃げ出したかった。

頭を下げたまま彼女の返事を待つが一行になんの反応も返ってはいない。

しばしの沈黙、時間にして数分。体感時間にして数年単位の間が過ぎたような気がした。頭を下げたままだから、彼女の表情が伺

えない。彼女は今、どんな表現を浮かべているのだろうか？今の俺にそれ想像するほどの余裕はなかった。相変わらず心臓の音が五月蠅い。

そして、ついにその沈黙を破り彼女から俺に声がかげられた。

「……………あ、あの……………その……………わ、わたしなんかで、い、いいんですか……………？」

今にも消えてなくなりそうな淡い声色。集団の中に入れはおそらく聞こえないであろう声が俺の耳まで届いた。

確かな 違和感……………。

今、思えば、おそらく、この次の発言が俺の今後の一生を左右するもっとも重要な発言だったのだろう。

「俺には行待さん以外は考えられない！俺は行待さんじゃなきゃダメなんだ！」

確かに俺は違和感を感じていた……………。だが、極限にまでテンパっていたこの時の俺の頭では、その違和感に気がつくよりも早く、一ヶ月前から何度も練習し、思い続けてきた言葉が先に口から飛び出てしまったのだ。

結局、俺がその違和感と過ちに気がつくのは彼女の返答を聞いて、彼女と初めて顔を向かい合わせた時だった。

「……………あああ、あの……………！わ、わたしでよければ、よ、よろしくおねがい、し、します……………！」

彼女の返事の内容が理解できなくて暫く一時停止。

ワタシデヨケレバヨロシクオネガイシマス……？

わたしでよければ、よろしくおねがいします……！？

よろしくおねがいします……ッ！

それってつまり……！

「いいのかッ!？」

顔を上げて彼女を見て…… って、あれ……？

「……は、はい」

そこには夕焼けより顔を真っ赤に染めて、恥ずかしそうに俯いた、かわいらしい女の子が一人立って……。

その女の子は俺のまったく知らない人だった……。

+++++

「……うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
あああああああああああああああああああああ」

自室に籠り俺は呻きのような叫び声をあげていた。なんか地獄の

底から聞こえてきそうな感じの。

「うるせえぞ！馬鹿兄貴！」

すかさず隣の部屋の愚妹が俺の部屋の扉を蹴破ってどかどかと侵入してきた。結構、大きな声になってたみたいだ。

「さっきからなに呻いてんだよ！いい加減うるせえんだよボケ！」

「……ごめんなさい」

素直に謝った。今の俺に愚妹と兄弟喧嘩するほどの元気はなかった。ぶつちゃけ生きているのも嫌だった。鬱だ。死にたい。

「なんか元気なくね？」

いつもの勢いが無い俺に愚妹は違和感を感じたようだ。まあ、いつもなら売り言葉に買い言葉ですぐに取っ組み合いの喧嘩に発展するところだしな。

「……おまえに聞きたいことあんだけどいいか？」

「1000円」

「はあ？」

言って手の平を俺に突き出す愚妹。

「質問一回1000円」

ニヤリニヤリといやらしい笑みを浮かべる愚妹。

「わかった。ほら、1000円」

財布から一枚、野口さんを引き抜き愚妹の手の平の上に置く。

「……ええ！ちよつ、兄貴！？マジでくれんのか!？」

野口さんを受け取ったはいいが急にうるたえ始める愚妹。確かに普段の俺のことを考えればありえないことだった。

「ほんとにどうしちまったんだよ？」

理由は話したくない。言ったらおせらく、絶対、必ず、間違いなく、笑われる。さらに馬鹿にされる。兄としての沽券に関わる。

「金は払った。だからおまえは大人しく俺の質問に答えろ」

「お、おつ」

愚妹の質問には答えず俺は一方的に話してしまうことにする。

「おまえ、うちの高校の一年に、行待って女の子がいるのは知ってるか？」

「行待？うーん、行待っつーと……えーっと……あれ、のことかな……？確かあいつ行待って呼ばれてたよーな……」

「知ってんのか？」

「おお、行待なんて珍しい苗字あんまいねーし。多分、知ってる。確かそいつ行待達って名前だろ？」

珍しい苗字か……。

確かに俺もついさっきまでは行待なんて苗字の奴は一人しか知らなかったんだけど……。一人だけだと思ってたんだけどな……。

「まあ、いい。とりあえず行待達さんについて、おまえが知ってること全部話せ」

愚妹の反応は微妙だが、今は藁にでも縋りたい思いだった。少しでも彼女についての情報が欲しい。とりあえず名前はわかったし。

「別にいいけどよ……。兄貴、あれに興味があんのか？」

愚妹はじゃかんいいすらそうにそういった。

「……あれって、なんだよ？」

愚妹の言い回しに少し引っ掛かりを感じた。あれ、とは普通、人を指すときに使う言葉か？

「あれ、確かイジメられてたぜ」

愚妹の言葉は冷めていた。

+++++

機能停止。俺はただ口をだらし無くポカーンと開いたまま固まった。

こ、この女の子は一体、誰ですか……？

見知らぬ女の子を前にして俺はもう何にも考えられなくなっていった。何にもわからない。脳みそから考える力がすっぽり抜け落ちてしまい、俺の思想力はないに等しいものにまで低落してしまっていた。

俺が告白したのは行待 行待 袖花じゃない……？

ぱくぱくと口を動かすも声は出ない、代わりに魂が口から抜け出て、あの世に飛んで逝ってしまいそうだった。

「……………」

そんな、あの世に旅立ちかけていた俺を現実に引き戻したのは、何処からともなく聞こえてきた女の子の囁り泣く声。

「お、おい……！き、急にどうしたんだ！？」

泣いていたのは他でもない知らない女の子。

女の子はその場にぺたんと座り込み、そのまま俯いて、嗚咽を漏らしはじめた。

「……………」

嗚咽と一緒にぼつんぽつんと水滴が落ち、床に僅かに染みを作っていく。

な、泣いてる!?

いや!ちょっと待って!もう、ほんと何が何だかわかんないんだが!どうして泣いてるんだ!?!俺なんかしたのか!?

もう完全に分けが分からなくなった俺は、その場でおたおたと所在無さ気にあわてふためくだけで、情けないかぎりだった。

よし、落ち着け!ちょっくら落ち着いて考えるんだッ!

こつこつ時は確か、あれだ!ちんすこつ!違う!深呼吸だ!

「……あ、あの……」

深呼吸をしようとした矢先、不意に女の子が口火をきつた。

「ど、どうした!?!」

俺の声は見事なまでに裏返っていた。

「……そ、その……き、きゆうに泣いたりして……あの、ぐ、ぐめんなさい……!」

「お、おう……!」

状況が掴めない俺はとりあえず女の子に生返事を返す。女の子は相変わらず俯いたままだ。

「あ、あと……あ、ありがとう、ございます……！わたしみたいなのを……す、すき、だって……いってくれて……」

女の子が顔を上げる。

「……う、うれしかったです……！」

それでもって真っ赤な目で俺にとびっきりの笑顔を見せてくれた。

何故だろうか……？

俺はそんな彼女の笑顔を目の当たりにして

ずきりと胸が痛んだ

+++++

布団に潜ったはいいがまったく眠気が襲ってくる気配がない。

疲れてる（主に精神面で）のに眠れないとはこれいかに……。つかれてるはつかれてるでも、憑かれてる（霊的なものが）ほうのつかれてるかもしれない。そう考えてみると心なしか体が重く感じるような気がする。やっぱり、今の俺には悪霊の二、三匹憑いてるってきつと。

まあ、俺が眠れないのは憑かれてる云々の話とはまったく関係ないのはいわずもがな。原因は勿論、行待さんの件だったりするわけ……。。

これからどうしたらいいんだろうか？

俺は今日、手違いでまったく知らない女の子に告白してしまった。

女の子の名前は行待達。

たまたま俺の告白しようとしていた人と苗字が同じだった。

それであろうことが了承を得てしまいカップル成立。

ありえない？ そうだな、ありえないな。あることが告白する相手を間違っ奴がどの世界にいるんだ？ さらに、フラれるならまだしも、おっけーを貰ってしまっなんて……なんだこれは？ 俺の人生は小説かなんかだったのか？

いや、そんなわけないけど……。

なんでこんなことになったのか と、考えて直ぐに考えるのをやめた。確かに気になるところだが、それはもう考えないことにする。今、それは重要じゃない。だいたい今更原因が判ったって、どうしようもないんだ。やっちゃったもんはやっちゃったんだから、どうしようもないものさ。考えても自分自身の馬鹿さ加減を再認識するだけになるだろうし。

大切なのは俺がこれからどうするかだ。

やっぱり

やっぱり、ちゃんと間違えましたと言っつのが筋だとは思っつ。

だけど……。

わたしなんかでいいんですか？

ありがとうございます

わたしみたいなのをすきだといってくれて

うれしかったです

あの娘の言葉と涙と笑顔が俺の頭の中をぐるぐるぐるぐる巡ると巡る。

考え方によってはおいしい話なのかもしれない。紛いなりにも

彼女が出来たのだから。

だけど、問題はそんなことじゃないんだ。

俺にはずっと前から好きだった人がいる。

好きになった理由を忘れてしまうほど前から好きだった。

気がつくとも視線は彼女の姿をおっていて、俺の視界のどこかには必ずとっていいほど彼女がうつつていて。

ずっと、ずっと好きだった。

それで、今日、やっと決心がついて。

それが、なんで、よりもよってあんな女に……。

「ッ!？」

違う!なに考えてんだ!!!

そうじゃない!それは筋違いだ!ただの八つ当たりだ!

悪いのは全部俺だ!

俺がちやんと教室に入ってきた奴を確かめなかったからだ!

だけど、もし、あの子の苗字が行待じゃなかったら……? ?

それも違う。

違うだろ。

ダメだな。

俺はやっぱり、ダメな野郎だ。

やめよう。これは、今、考えることじゃない。今更だ。

しっかり現実を見よう。

しっかり考えよう。

やっぱり。ちゃんと謝って、ごめんなさいって、すいませんでしたって、地面に額を擦りつけて誠心誠意謝罪しよう。

たとえ、それであの娘を傷つけることになっても。

そ、それに「あ、そうですか」みたいな感じですよ。すんなりいくかも
しないし！

でも、俺にはそんなすんなりいくとは思えなかった。

まだ、あの娘とは数分、数十分程度しか会ったことはないし、会
話らしい会話だっただけだ。

それでも、何となく、確信めいた予感があった。

それに……。

あの糞馬鹿愚妹の話を思い出す。

思い出しただけでも胸糞悪い。あんな話を平気に話すあいつもあいつだ。なんであんな平気でいられるんだ。

俺は勝手にあの娘の境遇を想像して、やる瀬ない思いをしていた。

なんで、誰も助けはないのか？

助けようとしはないのか？

そう、思う。

だけど。

偉そうにしてるが、結局、俺だって同じだ。

あの娘に関わり、愚妹から話を聞いてなければ何も思わなかっただろう。考えなかっただろう。

同情すらしない、まったくの無関心。

それが、ただ、やる瀬ない。

胃がキリキリと傷み、胸がもやもやとして釈然としない。

そうして、俺は答えを出す。

「……………間違えたことは……………黙っていよう」

ぼそりと口から出たのはそんな言葉。

俺は何を思っこの言葉を口にしたのか？

自分自身が分からない。

だけど、確かに俺の中にある気持ち。

その気持ちは同情以外のなにものでもなくて。俺はどうしようもない馬鹿な偽善者で、人間として最低。

それでも、幸薄なあの子に俺みたいな馬鹿野郎が、してあげられることがあるなら、なにかしてあげたかった。

浅はかで、ただの自己満足。

それは、多分、ただのごっこ遊びだ。

だけど、俺は 。

知ってしまったから、何かをしてあげたい。

俺は優しくありたい……。

さて、そろそろ、いいかげん寝ないとな。

枕元に置いてある携帯電話に手を伸ばす。

午前4時39分……。

「……はは」

携帯で時間の確認をして俺は顔を引き攣らせた。

もう、こんな時間かよ。

まあ、いいか。

今日はいつもより頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2546g/>

優しくありがたい

2010年12月30日14時32分発行